

月の都にいりにけり―『融』の世界とその享受―

同志社大学教授

山田 和人

『融』は、秋の仲秋の名月に照らし出された六条河原院を舞台上に繰り広げられる、優美にして典雅な能である。後シテとして現われる源融の至福の舞は、漢詩の清澄さと晴れやかな興趣が何よりの魅力であろう。月の都の住人が、都の塩竈の月の美しさに惹かれて憧れ出たのかと思われるほどに、幻想的な世界である。

演出装置としての「月」

そして、その背後にあるのが「月」の存在である。「月」に惹かれて、前シテも、後シテも現れる。「月」は「今」と「昔」をつなぐ最も重要な演出装置である。今で言えば、さながらタイムマシンというところだろうか。そればかりか、月を媒介にして、塩竈も六条河原院も、京の名所も、次々と展開していく。シテは、そこに次々と展開されていくシーンを自在に超越して渡っていく。そうしたどこか晴れやかで自在な雰囲気、この能には際立っている。それを支えているのが、「月」であり、「月」が漢詩的な清澄な清々しい風趣の充滿した六条河原院を、もうひとつの観念的な小宇宙として照らし出していると言える。その小宇宙には、時間と空間を越えた六条河原院が、うら寂しい荒涼とした廢墟でありながら、栄華を極めた遊樂の宴でもありえる不思議な空間として出現する。ここは、比喩的な言い方が許されるならば、月光に照らし出されて初めて見えてくる空間であり、「月」によって活かされる空間でもあった。

ランドスケープとしての六条河原院

六条河原院は、源融が、塩竈の景物と景観をそのまま人工的にうつして河原院に再現したものである。今風に言えば、ランドスケープとしての河原院を都に出現させたものである。それは壮大であり、広大なスケールを誇っていた。源氏物語の六条院とも比肩されることがしばしばある。そのモデルともされる。しかも、塩竈の塩焼を復元して、三十石の塩を難波津から運ばせて池の水を海水として、そこで塩汲みの生業をなし、塩焼きの煙をそのまま立ち上らせたという。京都は海のない都市であり、三方四方を山に囲まれている。その京都に、塩焼ができるだけの海水を池一面に張り、塩焼の煙を立てさせたというのは驚くべき光景として都の貴族だけではなく、多くの人を瞠目させたに違いない。後に触れるが、近世の作品になると、そうした壮大華麗な六条河原院の塩竈の浦に人々は貴賤群衆したと語られる。

その贅を尽くして作り上げられたランドスケープに対して尋常ならざる執着を抱く源融が、荒れ果てた庭園に昔の風雅な「遊樂の庭」を求めて憧れ出て何の不思議もあるまい。いわゆる複式夢幻能の範疇におさまらない背景にはこうしたこともあろうか。

『融』には、六条河原院にまつわる説話的な幽霊譚の装いはまったくなくない。『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『江談抄』等の説話的な執念や恨みがまじさが見られない。それらとは一線を画した詩的な凜とした律動が感じられる。説話的、散文的な執着執心とは次元の異なる、和歌、物語、漢詩等の典拠や素材を組み込んだ典雅

な趣きがあるのは、自ら造営した六条河原院への融の並々ならぬ月下のランドスケープへの思いだったのではないか。

人形浄瑠璃と『融』

さて、こうした『融』の世界は、近世の芸能・演劇にどのよう
に継承されているのか、振り返ってみたい。

近松には、『融大臣』がある。元禄六年（一六九三）正月以前、竹本座上演と推定されている（『近松全集』解説）。物部春主の謀反を鎮めるといふ縦筋に融大臣の恋を絡める展開である。融大臣は、最愛の青柳に瓜二つの陸奥の酋長者の娘白の前を慕って塩竈に下り、桂と呼ばれ潮汲み奉公する。総領の郡司に隠し男と疑われ、二人は美濃の国へと落ち延びる。大江の千里ら忠臣と土地の馬方に助けられ、春主らを捕縛し、無事、国がおさまる。

五段目では、陸奥塩竈の景をうつすことになった経緯が語られ、後半は『融』の世界となつて大団円を迎える。淳和天皇に陸奥の歌枕名所古跡の物語をすると、帝や人々は絵に写してほしいと興がる。融大臣は、それならば、歌や絵ではなく、海人乙女の潮汲みの有り様を見聞して民の暮らしに目を向けてほしいと言上し、塩竈の景をうつして六条河原院を造営することにする。方八丁に江を掘り、松島雄島籬が島八十八島を象り、毎日摂州より潮を運ばせ完成した河原院に主上をはじめ多くの見物衆が詰めかける。

ここからは、能『融』の世界となつて、海人乙女が汐汲みの様を見せ、娘の求めに応じて塩木の翁が都の名所を語り、汐を汲む所作をする。この場面は「ちかのしほがま」という節事として取り込まれている。塩竈の浦を都にうつした謂れを物語る場面は簡略化されているが、名所教えの場面はほぼ『融』を踏襲しており、この名所尽くしが人気を博したものと推測される。太夫、ワキ、ツレの掛け合いの語りによる聞かせ場ともなっている。その後、

能の後場の早舞の場面が展開され、「月の都に入給ふ御よそほひこそめでたけれ」となつて御代を寿いで千秋万歳楽となる。『融』が祝言の意味を持つ曲であることを踏まえて、これで大団円とする意図であつたと推定される。

また、近松以後の浄瑠璃としては、菅專助らの『融大臣塩竈花』がある。本作は、安永六年（一七七七）八月十五日、大坂豊竹此吉座にて初演された。融大臣は謀反の張本人として登場するが、実は、父左大将秀盛の悪逆を我が身が引受け謀反の張本人となることで、父を救おうとしていた。融大臣は、大坂に別邸を構えて、塩竈の塩焼く風景をうつして歓楽をきわめていた。塩竈で夫婦となつて子までなした仲の、塩焼を生業とする舅松兵衛、妻千賀、子大吉との再会により、その本心を明かす。一方、融大臣は、志岐に流罪とされた光孝天皇を密かに都に匿っていた。その忠孝に免じて、帝は融大臣の非道を赦し、融を六条河原院に流罪とし、塩竈をうつした河原院で生涯を終えるまで遊興の種とせよと勅命が下る。そして、この別邸には息子大吉を住侶として、大吉と融の一字をとつて大融寺を建立することが許される。最後に、父秀盛が奮戦するところに融大臣が宙を飛んで駆け来たり、父を諫めて出家させる。こうして御代が無事おさまるといふ展開になっている。融大臣が陸奥塩竈に滞在したという設定になつており、塩竈桜についての言及もある。ここでは、能『融』の場面は配されておらず、ひとつの世界設定として『融』が活用されている。左大臣融が、悪人と見せて、実は忠臣であつたといふとんでん返しが最大の見せ場でもあり、『融』が近世の忠臣義臣の語り物世界へと変換されている。ここには、人事を捨てて風雅に遊ぶ融の姿はない。むしろ、懊悩し、葛藤する左大臣融であり、その意味で『融』の月の庭で遊樂の舞に遊ぶ場面を盛り込むことはもはやできない。そのために、謡曲の詞章は鏤められているものの、その限りにと

どめざるを得ないことを作者は知っていた。

近松の『融大臣』もそうであるが、河原院に塩竈をうつした理由を融が当地に赴いたことがあるという事実として近世の人々は理解していたようである。『融』のなかには、なぜ塩竈の景をうつしたのかは記されていない。「融の大臣陸奥の千賀の塩竈の眺望をきこしめし及ばせたまひ」とあるのみである。古典を翻案していく時のひとつの典型的な手法ではあるが、登場人物の行動の理由や要因について分析的に究明し、そこに翻案のヒントを見いだしていくという姿勢が顕著である。それが融大臣の奥州下りとなつて形象化されたものである。そこで妻子とともに暮らすというのは、いかにも近世風ではあるものの、原作の融の行動の原理を明らかにしたいという衝動が、『融』を翻案する時の興味を中心であったことは確かである。

からくりと『融』

からくりにも『融』を素材にした作品がある。『融大臣三日月雛形』（他に別称もある）という演目である。能の前場後場を取り込んで詞章にあわせて人形の演技、演出が展開されていく。このからくりはふたつのからくり台によって演出されており、メインのからくり台には、雛が鳥を模した松と紅葉を配しており、もうひとつは、からくりならではの趣向であるが、後に水槽から魚を湧き出させるための水舟である。最初は、潮汲みの海人乙女が歌に合わせて踊りの所作をし、その後、台から水舟に渡り、潮汲みの所作をして、再び、もとのからくり台にもどってくる。その後、娘人形は、融大臣に変身して、切舞を演じる。この切舞は、おそらく能の早舞に相当するであろう。やがて、木々にかかった雲間から三日月が現われる。そして、三日月が釣針のかたちになり、また、弓となり自ずと弦を張り矢を放つと、紅葉の枝から雀が驚き飛び

去る。そして、紅葉の枝から虹の掛け橋が下がってきて、融大臣人形が畳み込まれて満月となり、月は掛け橋を渡っていく。その後、満月のなかに月宮殿が浮かび上がる。やがて、三日月は舟となり、兎が現われてその舟を漕ぐ。舟は舞台の上を走つて消える。これらが早舞の詞章に合わせて次々と展開されていったものである。複合運動型のからくりであり、しつかりと演出効果を意識したからくり芝居ともいべき筋立てを備えている。

基本は能の展開と詞章に即して構成されているが、前場は娘の潮汲みの所作を中心としており、名所教えは省略されたか、簡略化されたものと推測される。後場は、融の早舞が演じられ、その詞章にあわせて、月が釣針となり、弓となり、最後に融が、満月となって宙にのぼり、月宮殿に至つたことを満月に映し出して終わる。文字通り「月の都に入り給ふよそほひ あら名残惜しの面影や」となる。

このようにからくりは、能の詞章を立体的に再現している。潮汲みを海人乙女としているのは、近松の『融大臣』になつたものであろう。後場では、漢詩の清澄にして闊達な詞章に従つて、月を具象化して秋の夜にふいに訪れた遊楽の満ち足りた空間をイメージ化して見せた。能では、三日月が浮かび上がるのだが、仲秋の名月なればこそ、最後に満月を表し、そこに帰るというイメージを具現化したものであろう。いささか即物的な表現であり、能の清澄さとは対照的ではあるが、いかにもからくりらしい展開と言えよう。

能『融』の後場の月の様態を次々と展開させていく演技・演出、月の世界に回帰していくシテ融の遊楽のさまを継承し、新たに具象化をはかろうとしたのは、意外にもからくりであったとも言えよう。